

角とマント

増田裕美子

老人の恋をテーマとした論稿を連載中であるが、前号で取り上げた寝とられ亭主について以下に二、三補足して述べておきたいと思う。

寝とられ亭主は西洋において中世以降、非常にポピュラーな存在になったと言える。寝とられ亭主となること、妻に不義を働かれるということは、男の愚かさ、間抜けさを最もよく表わす事柄であり、男にとってこれほど不名誉、不面目なことはない。それゆえ西洋の夫たちはえてして嫉妬深く、妻に浮気されるのではと始終やきもきする。

さて嫉妬と言えば、日本では専ら女の属性のように考えられている。『源氏物語』の六条御息所を始めとして、嫉妬に狂う女、男の浮気に焼きもちを焼く女の話は実際数知れない。落語でもその種の話には事欠かず、「愷気は女の慎しむところ、疝気は男の苦しむところ」などという決まり文句が話の枕に登場する。男の浮気に女が嫉妬する——どうやらこれが

日本の伝統的な構図のようである。

ところで「角」は日本では特にこうした女の愷気、嫉妬を表わすものとされ、夫に浮気された女は頭から「角を出して」怒る。ここで思い起こされるのは能楽、例えば『葵上』のシテ・六条御息所の生霊。嫉妬の激しさのあまり、後場でシテは角を生やした鬼女に変身する。また、花嫁が婚礼の際に頭に被る「角隠し」。元来「角隠し」とは江戸時代浄土真宗門徒の女性が報恩講参詣の際に被った黒の帽子のことを言ったが、明治以降花嫁の被り物を指すようになり、女性の嫉妬心を戒めるものとみなされるようになった。

ともかくも日本では女が角を生やすものとされるが、一方西洋では角を生やすのは男である。浮気をするのは女であって、妻に浮気された夫、すなわち寝とられ亭主はその額に角が生える、というのである。

Many a man has good horns, and knows no end of them. Well, that is the dowry of his wife, 'tis none of his own getting.⁽¹⁾

りっぱな角を持ち、しかもその際限を知らぬ男は多い。なにしろ、それは女房の持参金で、自分で作ったものじゃない。

これはシェイクスピアの『お気に召すまま』第三幕第三場で結婚式を挙げようとする道化タッチストーンが述べる言葉。そして同じく『お気に召すまま』第四幕第二場で歌われる陽気な角の歌。

Take thou no scorn to wear the horn,

It was a crest ere thou wast born,

Thy father's father wore it,

And thy father bore it,

角を生やすは恥ではない。

生れぬさきからあったもの。

親父の親父が生やした。

おまえの親父も生やした。

ふり返ってみれば、ホメロス描くところのかの有名なトロ

イア戦争は、スパルタ王メネラオスが妻ヘレネをトロイアの王子パリスに奪われたことにその端を発していた。メネラオスには言わば寝とられ亭主の元祖というわけで、彼の名誉回復をはかることが、そもその戦争の目的であった。(ちなみに、ホメロスの『イーリアス』『オデュッセイア』は、浮気な尻軽女ヘレネと二十年間他の男たちの求婚を退けひたすら夫の帰宅を待ち続けた貞淑な妻ベネロペという二人の好対照をなす女性を軸に展開しているとも読めるだろう。)

それでももちろん、シェイクスピアの筆にかかるメネラオスとは言え、りっぱな角を頭に生やしている。例えば、パリスがメネラオス(メネレーアス)に手傷を負わされたことを聞いた時のトロイラスの皮肉な台詞。

Paris is gored with Menelaus' horn.

パリスはメネレーアスの角で突かれたんだ。

(『トロイラスとクレシダ』第一幕第一场)

戦争まで引き起こす寝とられ亭主の激情たるや驚くべきものだが、夫の妻に対する「嫉妬の炎」なるもの徒や疎かにはできないことは、例えば『オセロー』を見ても明らかである。あるいは『冬物語』のシチリア王リオンティーズ。彼らは言

うまでもなく自分の額に角が生えることを充分に意識している。

I have a pain upon my forehead here.

額が、ここが、痛むのだ。

(『オセロー』第三幕第三場)

オセローがこう言って妻デズデモーナに不義を匂わせれば、一方リオンテイズは妻ハーマイオニがボヘミア王ポリクシニーズと不貞の行為に及んだと思ひ込み、ハーマイオニのポリクシニーズへのもてなしぶりを苦々しく思つてこう言う。

O, that is entertainment/My bosom likes not, nor my brows!

おお、あの歓待ぶりは気に入らぬ、私の胸中も額も穏やかではないぞ。

(『冬物語』第一幕第二場)

こうして不義の疑いをかけられた妻たちの悲惨な行く末——デズデモーナは夫の手によって殺され、ハーマイオニは最後には生き延びていたことが明らかになるものの裁判にかけられ牢獄に入れられて、息子の死の知らせに息絶える——

は、寝とられ亭主だと思ひ込んだ夫たちの、寝とられ亭主以上の浅はかさ、愚かさを示しているのである。

さて、「角」はヨーロッパに普遍的な寝とられ亭主の重要な表象であるが、ここでもう一つ別の表象に話を移したい。それは十六世紀フランドルの画家ピーター・ブリューゲルの絵の中に現われている表象である。一五五九年という制作年が記されている『ネーデルラントの諺』は画中に約八五種の諺が表現されている作品であるが、画面の真中より少し下、絵全体の中心的な位置に赤と青のコントラストが鮮やかなカップルが見える。これは「夫に青いマントを着せる」という諺で、妻が不貞を働いて夫を欺く、という意味である。同じブリューゲルの作品とされる『ネーデルラントの十二の諺』の中にも同様の青いマントに身を包む男の絵があり、その銘文には「私は青いマントを身にまとうが、身を隠せば隠すほど人目についてしまう」とある。妻の不貞の行為によって夫は心ならずも有名になってしまう、というわけである。

当時ヨーロッパでは諺集の出版が相つぎ、版画など諺を視覚化したものも数多く流布していた。そのような状況の中で生まれた『ネーデルラントの諺』は同じブラバント地方のマリーンの画家ホーゲンバーク (Frans Hogenburg) の銅版画に直接的な影響を受けていると言われている。この版画は『青いマント』と呼ばれるもので、画面に四十以上のフラン

ドルの諺を描いたものである。むろんそのうちの一つが題名となっている例の「青いマント」の諺で、画面では左の前景に、妻が夫にマントを着せかけている図として描かれている。『青いマント』という題名は、青が伝統的に欺瞞の色であることから、単に一個の諺を指すというよりは、人間の愚かさ象徴する言葉として使われているようである。もちろん、その人間の愚かさの中でも寝とられ亭主の愚かさが一際目立つものとなっているわけで、ブリュッゲルの『ネーデルラントの諺』において不実な妻と寝とられ亭主のカップルが中心的な位置を占めている理由も納得できよう。

ところでこのカップルをホーゲンバークのカップルと比べてみるといくつかの点に気づく。表現上の巧拙は言うまでもないだろう。そしてブリュッゲルの方は彩色された板絵であるから、妻の派手やかな赤いドレスが夫の青いマントといかにも対照的でないやでも目につく。だが、それ以上にブリュッゲルの場合に目をひくのは、夫が杖をついていかにも足腰の弱そうな老人に描かれていることである。若い妻と年寄りの夫——不貞な妻と寝とられ亭主の典型。

すでに前号でも述べたように、中世後期の美術や文学において聖母マリアがますます若く美しく描かれる一方で、その夫ヨセフは老人化（すなわち寝とられ亭主化）する傾向がみられた。また、ブリュッゲルよりも五十年ほど前に生まれた、

ドイツ・ルネサンスの画家ルーカス・クラナハの作品の中にも、『不釣合なカップル』と題する作品があり、若い妻と年寄りの夫が描かれている³⁾。そしてその妻はお金の入った夫のポケットに手をさし入れている。

実はこのお金こそ、老人と若い女の関係を読み解く重要な鍵であるのだが、この点についての論議は次号に譲ることにしたい。

註

(1) 以下、シェイクスピアの作品からの引用は New Penguin Shakespeare による。

(2) Walter S. Gibson, *Bruegel, Thames and Hudson*, 1977, p.76 を参照。なお、ホーゲンバークの銅版画の上の部分には、「これはふつう青いマントと呼ばれるが、この世の愚かさと名づけた方がよいだろう」という銘文がある。

(3) クラナハには同様の趣向で『恋する老人』という作品があるようだが未見。